お殿様の枕もとに、年とった大きなひょうすんぼうが現れて、

「殿様、殿様……」

と、ゆり起こすのです。殿様がびっくりされてご覧になると、水でびっしょり濡れたひょうすんぼうが三匹両手をきちんとついて座っているではありませんか。

お殿様がじっとご覧になっていますと、真ん中の年取ったひょうすんぼうが、静かに口を開いて言うのです。

「お殿様、お殿様にはいつも可愛がっていただき、ほんとに有り難うございます。特にお城のあまった食べ物をお堀にお下げわたしくださって、私ども一族の者大助かりで大変感謝いたしております」

と、いいながら次のように申しあげたのです。

「実は、お殿様が藩内の農民の暮らしを豊かになさるために、水を欲しがっておられることを耳にいたしましたので、何とかお役にたちたい思いまして参ったのでございます。私どもがご案内いたしますのでどうぞお出で下さい」

と、申し上げたのです。お殿様は大層びっくりなされましたが、大変お喜びなさって、早速ひょうすんぼうについていかれました。

お城の裏山を、よんぐりへんぐり上がっていかれますと、チョロ、チョロ…と水の流れる音が聞こえてくるのです。お殿様がきっと見上げられますと、大きな岩の縁(ふち)からきれいな水がほとばしり出ているのです。お殿様は思わず大きな声で、「やったあー」と、叫ばれたのですが、そのとたんに、眼がさめられました。

そして、お殿様が自分の様子をご覧になりますと、体中汗いっぱいで、その上、着ている着物は水を浴びたように、ぐっしょりぬれていたのでした。

窓の外は相変わらず、しょぼしょぼと雨が降り続いており、ヒュルル…、ヒュルル…と、ひょうすんぼうの鳴き声がしていました。

お殿様はこれは有り難いことだ、それにしても只事ではないと思われまして早速、お側用人にお命じになって、屈強な、異色の武士を三名選び出され、こっそりとご殿へお呼び出しになりました。一人は、体こそ小さいがっちりした知恵のある侍で、茶道・文武両道に秀でた達人。もう一人は体が大きくて、やはり文武両道の誉れ高く、色は浅黒く顔つきはあまりよくないが、力が強く足腰の丈夫な侍で山歩きにかけては、高鍋藩唯一というつわものです。残る一人は、やせて、ひょろひょろしてはいるが槍の名人で器用この上はなく、たいていのものは作りこなせる、まことに調法な侍でした。

この大変特徴のある側近の三名の侍に、これこれしかじかと水源地探索の命令が出されたのです。

お殿様は三名の侍に、

「裏の山手には豊富な水量の水源地が必らずあるはずだ。何日かかってもよい。必ず見つけて参れ、見つかるまでは帰ってくるな」

という厳しい命令を下されたのです。

三名の侍は

「かしこまりました。命にかえましても必ず見つけだして参ります」

と答えますと、それぞれに我が家に帰り支度を始めました。

足ごしらえは特に丈夫にし、わらじを五足ずつ持ち食糧は三日分を準備した上で、再びお殿様とこまごました打ち合わせをしました。殿様は、最後に三名に向かって

「どうでも、こうでも水源地をさがして来い。藩の命がかかっている大事な仕事だぞ。そしてあくまで隠密にやれ」

殿様は一人ひとりの手を固く握りしめながら命令されたのです。

三名の侍は、事の重大さをかみしめ、さらに細かな準備をすすめました。

山に分けいる前には、ひょうすんぼうの好きそうな食べ物をどっさりお堀ばたに運んで

「ひょうすんぼうどの、たのんだぞ、俺達の助太刀をどうぞしてくれ」

と、祈りその夜は一か所に集まって床に入りました。

いよいよ出発の日です。大命を受けた三名の侍は、夜明けを待たないでまだ辺りは真っ暗な時間に家を出ました。今でいう脇集落に入り殿様の指示通りにお城の裏側をさぐりさぐり登っていきました。その辺りは今でこそ道路や家がありますが当時は自然のままで、大木が空高くそびえ名も知れない植物が生い茂り道もなく昼でも真っ暗だったのです。人など山に入ったこともなく、得体の知れない動物が飛び出すやら悲鳴のような鳴き声がするなどとても一人や二人では歩けるような処ではありませんでした。

三人は薮を押し分け崖をのぼりくだりしながら進みましたがその日は遂に水源地を見つけることなどできずとうとう日がくれてしまいました。

山の中に草を敷き、たき火をたいて眠りました。

次の日も朝早くからあちらの山こちらの谷へと一日中探しまわりましたが、お殿様の夢に出てきた水源地を探しあてることは出来ませんでした。三人は

「殿様はひょうすんぼうにだまされたのではないかな」

と、疑ってみました。が尚も歩き続け三日目の昼過ぎのことです。腹は減るし、食べ物は底をつき、のどもからからになり三名はヒョロヒョロと夢遊病者のように山の中をさまよっていましたが、遂にへとへとになり腰をすえて眠りこけてしまいました。

ところが、夢うつつにチョロチョロと水の流れる音を一番小さい知恵のある侍が耳にしたのです。小侍は、

「ハッ」として目を開き耳をすましますと、かすかに水の流れる音がするのです。

「おいおい、水の音だぞ。水の出る所が近いぞ」

と大声で叫んだのです。ぐったりと眠っていたあとの二人が「何っ　水だと」と飛び起きました。

勇気百倍とはこんな時のことをいうのでしょうか。三人の手・足・顔はとげでひっかき血だらけになりながら必死になって流れをさがしました。やがて岩陰からコンコンと沸き出る泉を見つけたのでした。

「やったぞー」

三人は抱き合い、小躍りしながらさけびました。真っ黒によごれた顔には嬉し涙がとめどもなく流れ、血まみれになった手足は、喜びのあまりブルブルとふるえる程でした。

そんな間にも澄みきった水はやすみなく「コンコン」と沸き出ます。水量も相当ある模様です。

三人の侍はこのことを一刻も早くお殿様に知らせるため疲れ果てた体を休めることなくお城へ急ぎました。

三人の知らせを聞かれたお殿様は大変お喜びになり早速工事に着手されたということです。

その後、この用水路が出来てからは毎年秋になると黄金色(こがねいろ)した稲が、広々としたたんぼいっぱいに実り貧乏だった領民の暮らしも次第に豊かになっていったということです。

昔、高鍋にはえらい殿様がいましたが、また、どえらいひょうすんぼもいたものです。

おさがりの箸

高鍋郷土教育資料集

今からおよそ百年余り前のお話です。

高鍋藩の家臣黒木義一氏は、どこからかとても立派な塗り箸をもらってきましたが、その箸を娘のナセに与えました。

娘のナセは生まれつき左利きでしたから、ご飯を食べる時はいつも左手に箸を持って食べていました。ところがその箸を戴いた夕飯の時のことでした。いつもなら左手でなんなく食べるのですが、その晩はどうしたことか、一旦左手で持つと直ぐに右手に箸をもちかえて食べ始めたのです。周りの者はどうしたことかと首をかしげましたが、本人はさも美味しそうに食べているのです。次の日も、またその次の日もやはり右手で箸を持って食べるのです。こんな様子を見た家族の者は大変不思議に思いましたが、父の義一氏はただニコニコ笑っているばかりでした。

その後、ナセはどうしたものか、あんなにやかましく言ってもなおせなかった箸の持ち方がぴたりとなおり三度三度の食事には必ず右手で箸を持つようになりました。

家族の者一同は不思議でなりません。思い切って父の義一氏にそのわけを尋ねてみましたところ、父は

「あの箸は、殿様が一、二度お使いになったものを戴いてきたのだ。他に訳のある箸ではないが、殿様の徳とい

うのはたいしたものだ。何も知らない幼い子どもでさえ左利きが当たり前の人のようになったからね」といったのです。

皆の者は、さてはそうだったのかと今更のように種樹公の徳の高さに感じ入ったということです。

そしてこの話は次から次へと広まり、たちまち家中の大評判となり、殿様の「おさがりの箸」を競って戴く様になったということです。

外国嫌いの金刀比羅さん

高鍋史友会報

高鍋町の平原集落の氏神として崇敬されている金刀比羅神社の神霊は、なかなか厳しい神として次のようなことが今でも言い伝えられています。

隣の木城村には、古来広い地域にわたって尊崇されている比木神社があります。祭神は韓国の福智王で彼地の乱を避けて日本に亡命し、初めは広島の方に足をとどめたが、ここは韓国に近く追っ手の兵も来やすいので安住の地を求めて船で九州東岸を南下しました。

ところが、日向灘で台風に遭い辛うじて高鍋の古港口にたどり着き、ここから上陸して今の木城村に定住し、ここで亡くなり祭られたのがここの神社とされています。

高鍋藩主の秋月家も、中国から朝鮮半島を経由して我国に帰化された関係から高鍋に来られても崇敬の念は厚いものがありました。したがって比木さんのお里廻り（親しく比木神社をこう呼んでいます。そうして年に一回比木さんは高鍋を訪れます。これをお里廻りと呼んで

います）の際は、島田御門から城内を通って蓑崎門の通過は自由で両門はそのために開放される特権を持っていました。そのお里廻りは多人数の神官たちが美しく飾り立てた馬に乗って神輿の後につづき誠に華麗なものであったといいます。その道順は、比木・出店・田畑・青木の坂・青木・川田・平原・松本・高月を経て島田門に達するものでした。

ところが、お里廻りの神輿が金刀比羅神社の真下の道を通る時、神官が馬上から落ちるということが毎年起こりました。これは金刀比羅さんが、外国の神が眼の前を通過するのを怒ってのことだろうということになり、平原だけは道順を変えて下通を通って松本へ出るようになったといわれています。

またその後のことです。お里廻り道に当たっていた井上に新しく移ってきた馬商売の人が道端に馬頭観音を祀りました。その観音像は田圃を隔てて直接金刀比羅神社と向かい合うようになりました。すると間もなくその馬商人の奥さんが不思議な病気にかかったのです。いろんな医師について治療に専念してもその甲斐なく、いつ癒るかもしれぬ心細さに人のすすめるままに占ってもらうと

「これは金刀比羅さんの怒りに触れているから、馬頭観音の向きを変えなさい」

と言われて、馬商人は早速観音様を神社の方を背にして据えました。

ところが、その奥さんの病気はケロリと忘れたように癒ってしまったというのです。

このことがあってから、平原の人達は誰言うとなく

「外国嫌いの金刀比羅さん」

と、語り合うようになったと言い伝えています。

百済伝説の青木坂

老瀬　長倉　寅男

百済（現在の韓国）の禎嘉王は、七六五年国が乱れて反乱軍のために国をおわれた。

王は、その一族をひきつれて広島県厳島についたが、その後厳島も追われて、高鍋の蚊口浦に着いた。

福智王は本拠地を現在の木城町比木に定めることとなり、一党を引き連れて比木を目指した。

このお話は福智王一行が高鍋の青木から老瀬へと向かわれた途中の小さな山の峠付近にある墓石にまつわるものである。

そこは今は荒れ果て木々と竹藪に覆い隠され、よく探さないと分からないが、石塔が五、六基あり、墓石があることは誰の目にも歴然としている。

その昔、福智王がやっとの思いでこの峠にさしかかると、末の姫君が突然病気にかかられ、手を尽くして介抱されたが遂に亡くなられたそうな。それで仕方なくなきがらは東の方の谷沿いに葬られて、悲しみのうちに比木へと旅立たれたという。

古老は、「私がまだ小さい頃、この峠の下の畑に住んでいたが、腹痛だとか歯痛・足腰が痛いときには、この墓前に油あげを一枚お供えしてお祈りすると、不思議にそれまで痛んでいたのがピタリと治った」と話していた。それで近くの人々は、よくお参りに来たということである。なきがらを埋葬された谷は、現在削りとられて無いが、県道のカーブのところの中ほどだったと話されていた。

この話を裏付けるように、青木坂の通行の習わしというのがある。比木神社の神事「お里廻り」と「大年下り」のとき、袋の中へ御神体を入れそれをかついでいかれるが、その途中、笛と太鼓の音が近づくと、村々の老若男女が沿道に「比木さん」を出迎え、おさいせんを上げて拝むのである。また、その行列の後に大勢のお供も加わって大変な賑わいをみせている。

ところが、この行列が青木の坂にかかると、今まで賑やかに打ちならしていた太鼓と笛を止めて、物音をたてないように静かにそーっと通るのである。葬られた姫君

が「私も連れていって」と泣きながら後追いされるので、笛太鼓を止め物音をたてないようにそっと通るというのである。

私は、この話をふと思い出して先日山に登った。姫君の墓石は、落ち葉が積もり雑木や小竹などの中に、形こそ風化しているものの、今も、昔の姿そのままであった。落ち葉を払い、枝をおろし、雑木を切り払ってお祀りした。

誰も参らず、誰も祀らず、姫君の霊はさみしい限りだと思いつつ山を下った。

雪隠（せっちん）免許

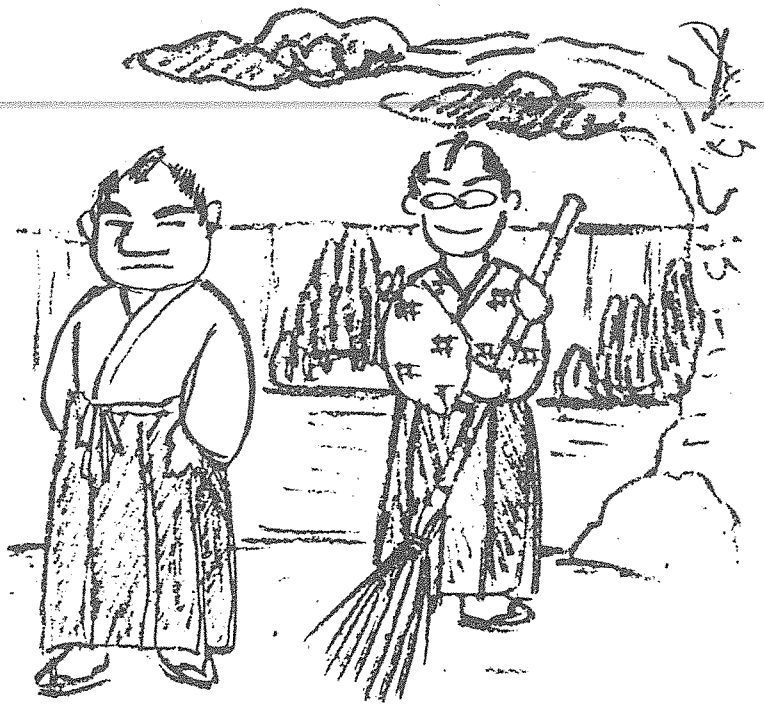
蓑江　手塚　隆吉

手塚忠太右衛門は武道の達人であるが、この人の家に住み込んでいる門人の山名熊四郎はなかなか武道がよくでき、既に免許以上の腕前であった。

しかし、免許はなかなか許されないので熊四郎は、先生であり主人である忠太右衛門に、それとなく免許のことをお尋ねすると「ではいつでもいいからすきを見て、一本参ったという目に合わせたら免許をやろう」との返事、それから熊四郎は、すきを見て先生を打ち込もうとするがなかなか油断もすきもない。

先生のお供をして行くとき、今日こそはと後から打ち込もうと木刀に手をかけると、先生は後ろをひょっと見てにっこりと笑われる。また、すきを見て今度こそと思うと「駄目、駄目」とやられる。

こうした日が続いたある日、熊四郎例によって庭の掃除をしていると、先生が腹下しをされたらしく、度々便所に行かれる様子、「しめた」と、熊四郎ははだしのま



ま便所に「先生」といってとびこんだ。先生びっくり「許す」とおっしゃった。やがて、先生は便所から出てこられると熊四郎を呼ばれた。熊四郎は「許す」とはおっしゃったものの裸足で座敷を歩いたので叱られるのだとおそるおそる先生の前に出た。先生は、「熊四郎、あの気持ちを忘れるな」とついに免許を授けられ、そして士分にとりたてられた。

それからずっと後のことである。弓の三五兵衛先生と連れ立って品川付近に遊びに出かけたところ、隣席にいた相撲取りがわざとけんかを吹きかけ、衆を頼んで刀のこじりをけって「勝負せい」とどなった。三五兵衛先生は後を振り返り、「熊四郎やるか」「あんげ言うかりやりやんしゅ」と言って、先生を側に腰かけさせておいて、さっと相手の中に飛びこみ、またたく間に三人を川の中に投げこんだ。

相手がこれに恐れて逃げ腰になったところで熊四郎は、「先生、さあ逃げましょう」と言って二人は麻生の邸までどんどん走って帰った。このさし手といい、引手といい、これも熊四郎の免許以上の腕前の見せどころであっただろう。

弥左どんの鈴虫と椋の木

蓑江　手塚　隆吉炉辺談

弥左どんとは、高鍋藩士竹原弥左右門の呼び名である。住居は小丸の上、役は奥向きの勤めであった。

あるとき、奥方様はじめ奥女中達の間に鈴虫の話がでた。そのとき、「ああ、鈴虫ですか。鈴虫ならうちの庭に沢山おります」と弥左右門が申し上げた。「まあ、この辺りに見たこともない鈴虫が、お前の家の庭に沢山いるのなら取ってきておくれ」ということになった。

勿論、弥左右門は承知して帰ってきた。そして庭にしゃがんで黒い虫を紙袋一杯とって翌日御殿に上がり、沢山の女中達の前で得意そうに持参した袋を破った。ところが、黒いギメ（こおろぎ）が、ピョンピョンととび出し座敷いっぱいにとび廻り出した。皆は驚いて、キャッキャッと逃げ廻った。

どう見てもコオロギである。女中達は皆笑いだした。奥方様も、「弥左右門、これはコオロギではありませんか」と、おっしゃると、「いや鈴虫です」と、答えた。

「いや、コオロギだ」と言うと「いや、鈴虫です」と答えてきかない。後には、「コオロギでも鈴虫です」と、とうとう鈴虫でがんばり通した。

それから、この高鍋では、コオロギのことを「弥左ど

んの鈴虫」というようになったそうである。
またある人が弥左どんに、「あなたの所の裏の榎の木が……」と言うと、「いや、あれは椋の木です」と言った。「でも榎の実がなるじゃないですか」と言うと、「いや、榎の実がなっても椋の木じゃ」と言ってきかない。実に頑固なじいさんであった。
由来、高鍋には、西と言えば東、北だと言えば南だと言うようなものを「ヤザエ」とか「ヤエ吉」とかいうのであるが、これから出ているのであろう。

万蔵さんの智恵

蚊口　日高勝次郎

蚊口の街中を流れる宮田川の川口は、千石船（せんごくぶね）が出入りする程の港でした。両岸には数百年を経たと思われる松の大木や大きい雑木等が生い茂り昼間も暗い程で、その枝は川の上までのびていて川面は青々として大層深いものでした。
したがって、川筋の家では商売用の、千石船を持つ家も少なくありませんでした。そのなかで網屋（あみや）（屋号）の万蔵さんの家は大きい方で船子や船を沢山抱えていました。ある時のこと、万蔵さんは川端に立っている大きな木を切り倒して、いく日か月日をかけ、大きい立派な通称千石船を造りました。そしてすぐ下の川に浮かべてお祝いも済み、いよいよ小丸川口の方へ漕ぎ出すことになりました。
ところが、船が造られたのは「鯨橋（くじらばし）」の上流だったから大変です。「鯨橋」のところまで漕いでいきますと、船の上の方が橋げたにつかえて、どうしても通ることが

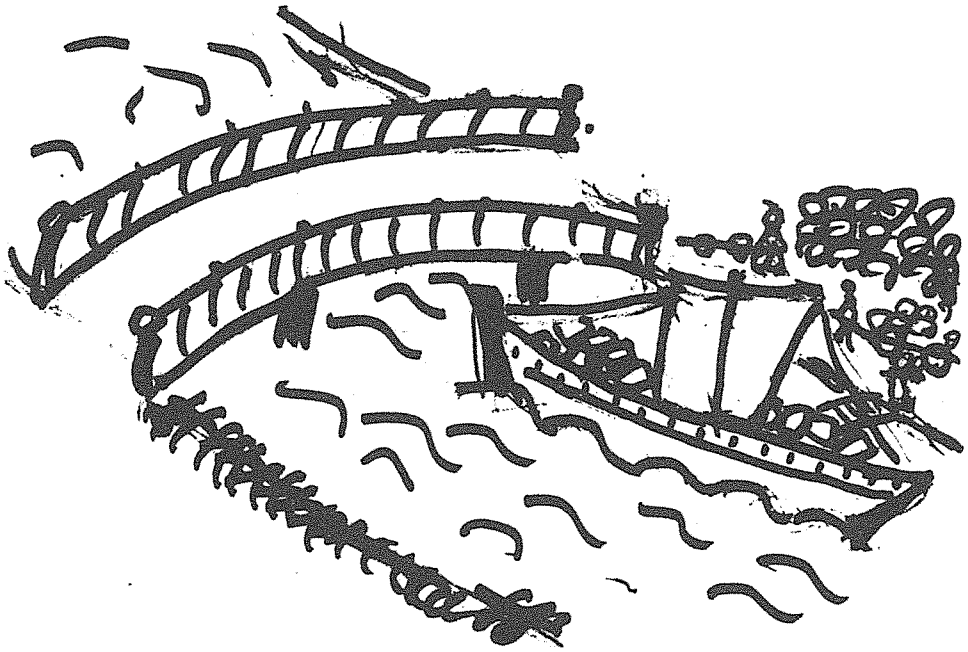
できません。はたと困り大騒ぎになりました。万蔵さんはしばらく腕組みして考えていましたが、おもむろに口を開いて言いました。

「付近にある出来るだけ大きい石を船に運び込んでくれ」

職人達は思い思いに石を抱えて、次から次へと船に持ち込み始めました。やがて小半刻（約一時間）も経つと船は石の重さでだんだん沈み始め、やがて千石船は「鯨橋」の下をゆっくりとくぐって、小丸川の方へと進んでいきました。

この様子を見ていた付近の人々は大喚声（かんせい）を上げ、手を打ち鳴らしながら万蔵さんの知恵を賞賛しました。そして、このことは町中で大評判になったということです。

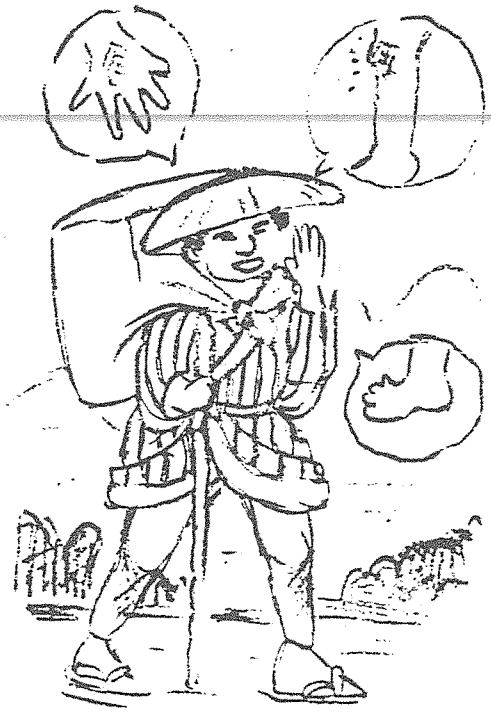
※　「千石船」というのは大きい船を言うときの表現のようで実際は「五百石」程度の船だったようです。



しょぜぐすり（せんじ薬）

蓑江　手塚　隆吉

「来たわいな。来たわいな。来たというてもお客じゃござらん。飛脚じゃござんせん。河辺家伝来のしょぜぐすり。さても、しょぜぐすりの効能は、打ち傷、やけど、水虫、肥まけ、ひび、あかぎれに至るまで、油にとかして急所につくれば、痛むことなくたちまち治る。さあさあお買いなされ。一包わずかに一銭五厘、一銭五厘」と、うたいながら薬売りは田舎を歩きまわっていた。



もとから、この辺りは皆農業で日中はほとんど野良仕事に行って留守の家が多かった。

ある日のことである。薬売りが例の如くうたいながらある厩をのぞいて見るとハミ桶が空っぽだ。そこでハミ桶一杯ハミを切っておいた。

このことを知らない農家の人は、今からハミを切って馬を飼わねばならんと厩に馬を引き入れようとしてびっくり仰天した。ハミ桶には一杯ハミが切ってあるではないか。農家の人は目をパチクリさせるばかりであった。

ちょうどこのとき薬売りがやって来た。

「なかなかお働きなさるな!!失礼だとは思いましたが、ハミがないので少しばかり切っておきました」

「さては、あなたがはみ切ってくださったのか。やれやれありがたいことだ。実は不思議に思っていたところです。本当にありがとうございました。さあ何もありませんが一献差し上げますからどうぞお上がりください」

というわけで、薬売りは家にあげられて焼酎の振る舞いとご馳走になった。

そのうえ薬まで買ってくれ、近所にも吹聴してもらっ

た。これが縁となって折々に廻っていくようになった。その薬は効能以上に効くと評判が甚だよろしく、皆、彼の来るのを待つようになったという。

「モンヂさん」の神通力

正祐寺　甲山　勝代

正祐寺の大寺に、大きな水車がありました。農家の人々はその水車で食糧の米や麦をはがして（精米・精麦のこと）いました。その頃は物を運ぶ時は、馬か人間の肩にかついで運んでいました。

籾（もみ）は叺（かます）（穀物を入れる袋約五十キログラム）に入れて馬にくらをつけ、そのくらの両側に一俵ずつ合わせて二俵くくりつけて、水車小屋に運んで白米にしていました。その他の農家は自分の家で、踏みうすがあって一回に五升位の籾を臼に入れ、人の足でスットンスットンと時間をかけて白米になるまでついたのです。

その水車の持ち主で、米踏みをしていた人が「モンヂさん」です。いつも神様を拝み神通力のある不思議な力を持っていました。農家で子供が病気になると、「モンヂさん」の所に連れて行ってお願いするのでした。

「モンヂさん」は、神様にお祈りして子供の悪い所を手でなでたり、さすったりしてくださるのです。ところが

暫くすると子供も笑う程になり、病気も軽くなってくるのでした。そして病気の治し方を教えて下さるのです。それで地域の人々は病人が出ると「モンヂさん」の所にいって、色々と病気の治し方を習ったのです。それはそれは沢山の人々が「モンヂさん」に助けてもらったのです。

昔は重病人が出ると病人をその戸板の上に寝かせてふとん等をかけ、長い棒で二人ないし四人で医者までかついで運んで行き治療したのです。それを当時の人は「タゴシ」が通ったと評判したものです。

昔は病気になると、お金も要るし又多くの人々の、加勢も求めなければならないので大変なことでした。それで病人が出ると「モンジさん」のところへ頼みに行って、早めに色々と手当てをして、それ以上悪くならない様に教えてもらったのです。

いわば心から病気を治す方法で、今のように薬を沢山飲んで、治す方法ではなかったのです。だから地域の人々は「モンジさん」を信頼して色々と病気や、その他のことを頼んだのです。「モンジさん」の孫になる「初さん」という人がおられました。「初さん」も神様を信心されて神通力があり、病人や色々なことについて、沢山の人が教えを受けていたようです。

ギャフンと参った

蓑江　手塚　隆吉

ある日のことである。例の如く、しょぜぐすり売りが「来たわいな、来たわいな。来たというてもお客じゃござらん。飛脚じゃござんせん……」の歌をうたいつつ、田舎まわりをなす折柄、ある家を訪れたところお婆さんが一人いてご馳走を出していろいろもてなしをしてくれた。

彼は、盃を重ね酔がまわるにつれて浮き浮きして心地よく何となく面白くなったので、

「おれが義太夫を語ってきかせる」

と言って、大いにうなりだした。

お婆さんは、まじめくさって聞いていたが、どうしたはずみか急に悲しくなりシクシク泣きだした。彼は

「おれの義太夫がうまいので、それで悲しくなったのだろう」

と、いよいよ得意になって声を張り上げて語りだした。

さて、語り終って

「どうだ、婆さんうまいもんだろう」

と言えば、お婆さんは涙を拭き拭き

「ハイハイ。あまりうまいのでつい涙がこぼれました」

と言う。彼は、ますます乗気になって

「そうだろう。その筈だ」

と言えば、お婆さんは、

「実はな。私にはあなたの年位の伜がおりますが、飲み助で仕事はせず、どこやそこやを飲み歩いてうろつきまわり、一向顔も見せません。今頃は、どこにどうしていますやらわかりません。考えると悲しくなってつい涙にむせび返ったのです」

と、目をこすりこすり話した。

さすがの彼も一言もなく「さてはそうであったのか」と、ギャフンと参ってしまったということである。

第三部　由来・思い出の部

鶯巣の池

蓑江　手塚　隆吉

高鍋東小学校の北に鶯巣と呼ばれている池がある。その池の南に小さな森があった。その森に、年々鶯が来て巣を造りひなを育てる。一年毎にその巣の数も増え、ひなも数が多くなった。その森に育つ鶯はみなむつまじく平穏に暮らしていた。人々はその森を名づけて「鶯巣の森」といった。

ある日のこと、どこからともなく一匹の大蛇が来てその巣を襲った。鶯は驚いて鳴き叫ぶ。ちょうどそのとき通りかかった一人の若者があった。この若者は、名を太左衛門といってこの村の庄屋の一人息子だった。庄屋は人をよくあわれみ、情け深い人なので、いつとはなしに仏庄屋の名がついていた。この親にしてこの子ありで、太左衛門も父の血を受けた程の人物であるから、村人は親しみを持っていた。

今鶯巣の森を通りかかると、けたたましい鶯の叫び声が聞こえるので、太左衛門は急いで鶯の叫び声のする方に走っていった。たちまち太左衛門の顔は変わり、彼はその大蛇に向かって言った。

「大蛇よ、この森は鶯巣の森といって鶯がひなを育てる山なのだ。それなのに、どうしてこの山に入って鶯を捕らえようとするのか。この小さな鶯を食べたとしても何程のことがあろうか。もし、お前の子をさらう者があったらどうする。自分の身をつねって人の痛さを知れ」

大蛇は、首をうなだれてそのままどこともなく去っていった。

それから、三年の月日が流れた。その年は日照りで何十日と雨が降らない。田んぼの水はかれ、稲も枯れるより外ないという有様だった。したがって、各村々で雨ごいをするけれどもその効果はなく、ますますはげしく照り続いた。

そんなある夜、太左衛門の枕辺に一人の女が来て

「私は鶯の精ですが、この前は有難うございました。お陰であれから大蛇は姿を見せません。今晩あがったのは、

あの森の北側にある二反歩ばかりの荒れ地を池にしてはと思い、そのお許しを受けに参りました。この前のご恩報じなのです」

太左衛門は、

「それはよかろうが、にわかにそんなことは出来まい」

「いやいや、私にお任せください」

「ではお頼みしよう」

と言ったかと思うと、女の姿はかき消すように消えてしまった。

太左衛門は不思議に思って、

「今のは夢であったのか。いやいや、夢ではない。今の今まで話していたのだ。妙なこともあるものだ」

と考えながらいつしか眠ってしまった。夜が明けると間もなく、太左衛門は鴬巣の森に行って荒れ地を見て驚いて叫んだ。

「や、やー、これは……」

昨日までの荒れ地は池となり、水が溢れるばかり入っている。太左衛門は急いで家に帰り、父にこのことを話した。父は今更のように驚いて村人をつれてすぐに行って見た。

いつの間に出来たのか大きな池に水が満々としてあふれ出ている。

太左衛門は、村の人々を集めてこのことを話すと、今まで青菜に塩だった人々は元気を盛り返して、次から次へと田に水を引き入れる。その近傍はいうに及ばず、みな水を引いたが、池の水は少しも減らない。隣村までもその恩恵をこうむった。そしてその後誰いうとなく「鴬巣の池」というようになった。

このことがあってから、どんなに日照りでもこの池の水はあふれるばかりであったが、そういつまでも続くはずはなく何十年か経つうちに、池の水はからからになった。そのとき太左衛門はもう七十五のおじいさんであった。村人達は今更のように騒ぎだした。

「池をらさえよ。水神様をまつれよ……」

と言って、池をさらえ水神様をお祀りしてもその効目はみえなかった。

そんなある夜のこと、太左衛門の家に一人の若者が来て

「私は、今から五十年の昔、鶯巣の森で鶯を捕ろうとした大蛇ですが、あなた様の教訓身にしみて鶯を捕ることを思い止まりました。そればかりかその後は決して悪い心を起こしたことはなく、今日までお陰で山に千年の業を積むことができました。これから池に千年おれば昇天することができます。つきましてはあの池に私を住まわせてください。私の住んでいる間は決して水をからさせません。なにとぞお願いいたします」

太左衛門は、

「では、あなたの姿を見せてはくれぬか」

若者は、

「はい、承知いたしました」

と言って、身ぶるいしたかと思うと、十畳敷にもはいらない程の大蛇になり、目は電灯のようで口からは火焔を吐き、雲を呼び、雨を降らし、風さえ起こして恐ろしいとも何とも例えようがない。さすがの太左衛門もしばらくは言葉もなく、ただぼうぜんとしていたが、しばらくして気を取り直し、

「よくも大きな大蛇になられたもんだ。これからは、鶯巣の主となって村を守ってくだされや。お頼みいたしますぞ」

と言うと、風も止み、雨も収まり、大蛇は元の若者となり、にこっとして去った。

太左衛門は翌朝前夜のことを村の人達に話し、鶯巣の池に行って見て驚いた。昨日までのからからの池は水があふれていた。人々はみな喜んで池の主を祀ることにした。

それから一千年余、別に変わったこともなく平和な流れは年月と共に経った。そして当時の村人からその口伝えもわすれられようとしていたが、ある日、一天にわかにかきくもり墨を流したような空は次第に池に近づいたかと思う間もなく、大粒の雨となり、風は大木をゆすって吹きだした。これはただごとではないと、村人が池の方を見ると、池の辺りは一面黒雲に包まれ、ぴらぴらと大蛇の尾が見えた。人々は今更のように驚いて

「池の主が昇天したのだ」

と言いあった。間もなく大嵐も止み静かになった。これから何千何百年たったか分からないが、今はここが池